

CHUKYO UNIVERSITY

SPORTS

Vol.20
2019/5月号



PICK UP!!

2020 東京へ

Winter sports Report

2018-19

冬季競技 結果報告

NEWS FLASH

プロボクシング田中恒成初防衛
スポーツミュージアム開設へ
附属高校eスポーツ部創部

先輩NOW

角谷貴恵さん(広島東洋カーブ職員)

挑戦する大学

PICK UP!!

2020
東京へ

川本選手



相馬選手



西津選手



小西選手(右)

Swimming

相馬・西津両選手がユニバーシアード代表に

競泳日本選手権で入賞

競泳の第95回日本選手権大会が4月21-28日、東京辰巳国際水泳場で開かれ、中京大勢は3選手が表彰台に上った。

大会は第18回世界選手権大会（7月21-28日、韓国・光州）と第30回ユニバーシアード大会（7月4-14日、イタリア・ナポリ）の日本代表選手選考会を兼ねており、中京大からは女子自由形の西津亜紀（スポーツ科4年）、同バタフライの相馬あい（スポーツ科4年）両選手がユニバーシアードの代表に選出されたが、世界選手権代表には今大会では中京大関係選手は選考規定に届かなかった。

佐々木祐一郎監督は、「全体的に低調な中、中京大勢も本来の力を発揮できなかった面があった。再度、ジャパンオープン（5月30日-6月2日、東京辰巳国際水泳場）で世界選手権出場を目指したい」と力を込めた。

そんな中で気を吐いたのが男子バタフライの川本武史選手（2016年度スポーツ科卒、トヨタ自動車）。大会最初の決勝種目50メートルで23秒40のこれまでの日本記録と同タイムで2位に入った。また、女子背泳ぎでは、50メートルで高橋美紀選手（2018年度体育研究科修士課程在学中、林テレンプ）が28秒49で、200メートルでは小西杏奈選手（2018年度スポーツ科卒、サイサン）が2分10秒50とともに3位入賞を果たした。

Track and field

女子棒高跳びの 南部選手 無念の棄権



南部選手

陸上競技部の南部珠璃選手（スポーツ科3年）が、4月21日（土）にカタール・ドーハで行われた陸上競技のアジア選手権に女子棒高跳びの日本代表として出場した。「しつかりと自分の力を発揮していきたい。そうすれば結果がついてくると思います」と入賞を目指していた。

南部選手は昨年6月に山口市で行われた日本選手権で自己ベストの4.09mを跳んで見事に優勝、今回の日本代表選出につながった。昨年9月のインカレ（川崎市・等々力陸上競技場）では3.170mの平凡な記録で5位に終わり、「日本選手権に勝ったことで何とかしなくてはとの思いが強すぎた。勉強になりました」と、冬季に練習を積み重ねアジア選手権に挑んだが、残念ながら怪我のため棄権をした。しかし、6

月の日本選手権で同じ種目を制し、派遣標準記録を突破すれば、ドーハで行われる世界選手権に内定する。

今季の南部選手の跳躍に期待したい。

中京大関係のアジア選手権出場者は、現役陸上競技部員は南部選手ただ二人だが、OB5人が代表に名を連ねた。400m障害の安部孝駿選手（2013年度体育卒、ヤマダ電機）5位、棒高跳びの山本聖途選手（同、トヨタ自動車）7位、円盤投げの湯上剛輝選手（2015年度スポーツ科卒、同）4位、ハンマー投げの墨訓熙選手（2017年度体育研究科修士課程修了、小林クリエイト）9位、十種競技の中村明彦選手（2012年度体育卒、スズキ浜松AC）3位であった。

スペシャル・インタビュー

池田樹生

【いけだみきお】パラ陸上競技選手

2020年を目指して

池田樹生選手（2018年度スポーツ卒、博報堂デジタルアドバタイジングコンソーシアム）は、2016年のジャパンパラリンピックの400mで日本記録を樹立、17年のロンドン世界選手権では4×100mリレーでアンカーとして出場し銅メダルを獲得、東京パラリンピック出場を目指している。

「大学四年間で、国際大会にも何度か出場し、多くの経験ができました。リレーで銅メダルを獲得したロンドンの大会では、100m予選でイギリスのバラスポーツのヒーローであるジョニー・ビーク選手と走ることもできました。ロンドンではオリパラ大会以降バラスポーツの注目度が高くなり、満席の会場の中で走れたことも大きな体験でした」と池田選手は振り返った。

「大学では設備の整った環境でトレーニングができて本当に充実していました。健常の選手と一緒に練習をしていましたし、特別扱いもされなかったのが良かったです」と話す。三好高校陸上部時代、中京大学の練習に合流して出会った佐藤圭太選手（2013年度体育卒、ロンドン、リオデジャネイロパラリンピック日本代表）に助言を受けることができた。佐藤選手の背中を追いかけて大学に入学。

競技に関する相談にのってもらう機会も多かった。しかし義手と義足の両方をつける男子選手は世界でも池田選手だけ。練習は自ら試行錯誤してより良い方法を探した。

14年からは企業の競技用義足の開発にも携わってきた。卒業後は、「いつかは自分にしかできないことをやりたい。アジアの貧しい国での義足の普及活動もしたい」と考えている。また在学中、部活と勉強を両立させながらセカンドキャリアについても考え続けた。卒業後は競技用義足の整備・開発を行う会社がある東京に住むことを決め、大手広告代理店系のネット広告会社の陸上部に所属している。また自分の選手寿命を考え28年のロス五輪までを見据える。

東京パラリンピックでは自身が日本記録を持つ400mの競技が無く、100mと走り幅跳びで出場を目指す。池田選手は100mの自己ベストを昨年出したばかり。「自分にはまだ伸びしろがある」と、選考会が行われるこの一年が勝負の年と練習を続けている。

中学時代に幅跳びのパラ選手の写真（山本敦選手）を見て衝撃を受けて陸上を始め、「パラリンピックに出る」と周囲に宣言して約7年。出場にかける思いは強い。「プレッシャーもありますが、感じても何もできない。だったら楽しもうと思います」。自分の言葉で理路整然と話す様子は自信に満ち溢れており、東京パラリンピックでの活躍を予感させた。





2018-19

冬季競技
結果報告

Winter sports Report

* フィギュアスケート



フィギュアスケート 宇野選手

宇野昌磨選手（スポーツ科2年／トヨタ自動車）は、昨年の平昌五輪での活躍は記憶に新しい。今シーズンも四大陸選手権、全日本選手権、グランプリシリーズスケートカナダ、グランプリシリーズNHK杯で優勝した。平昌五輪終了後、「満足したシーズンだったが、4回転サルコウへの挑戦やジャンプの質を高める」と語っていたが、その結果を出したシーズンとなった。3年後の北京に向けてさらなる挑戦となる。

* ショートトラックスピードスケート

吉永一貴選手（スポーツ科2年）は、2018-19シーズン、ショートトラックW杯に初参戦した。第1戦（カナダ・カルガリー）で日本男子として17季ぶりに1500メートルで優勝した。それ以降も1000メートル4位、500メートル6位と結果を残したが、世界選手権では悔しい結果となった。

吉永選手は「滑りと気持ちがかみ合ったときは、どこまでも伸びる感覚で滑ることができたが、シーズン後半、悪かったときは悔しい思いをするなど両極端のシーズンだった」と静かに語った。また、「世界でのレースはトップ選手が強気で攻め、とてもレース

展開が速い。それについていくためにアジャストしていかなければならない」と熱く語った。その言葉からは世界で戦い自分の力を知り、さらに挑戦する意欲が感じられた。

平井亜実選手（スポーツ科4年）は、1年間で調子を上げてW杯に初出場し1000メートルで7位、8位と入賞を果たした。

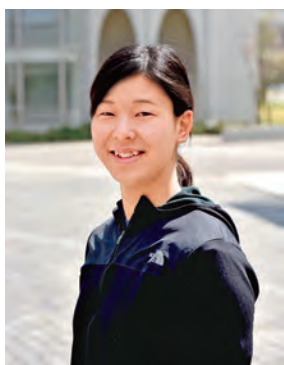
平井選手は、平昌五輪を自宅のテレビで見て、自分も五輪に出たいという意欲がわき、練習に取り組んできた。その結果、世界に挑戦する切符を手に入れた。

「W杯に挑戦して、世界との差は大きいことを肌で実感したことが大きな収穫だった。次につながる良い刺激ももらった。3年後の北京五輪を目指して、次年度のW杯ではA決勝に進出して戦いたい」と抱負を語った。

2019-20シーズン、ショートトラックW杯の第3戦は名古屋で開催される。両選手とも「ぜひ、この大会に出場できるように頑張る」と決意を述べた。



ショートトラック スピードスケート 平井選手(左)、吉永選手(右)





堀島選手

佐藤浩之 / アフロ



吉永選手



平井選手



高原選手は右から2番目(赤のビブス)

西村尚己 / アフロスポーツ

2018-19 ウィンタースポーツでも多くの選手が活躍した

❄️ スノーボードクロス

日本でスノーボード競技といえばハーフパイプがよく知られているが、複数の選手で同時にスタートし複数のキッカーやウェーブ、バンクを滑走するスノーボードクロスで世界に挑戦している中京大選手がいる。

高原宜希選手（スポーツ科4年）は、2018-19年のスノーボードW杯第5戦（ドイツ・フェルトベルク）で日本人選手初のビッグファイナル（決勝）に進出し4位となった。またユニバーシアード冬季大会（ロシア・クラスノヤルスク）では3位表彰台に上がった。

高原選手は5歳からスノーボードを始め、高校生からスノーボード競技に挑戦している。「スノーボードクロスは体重が重いほうが有利となるため、オフシーズンはフィジカルトレーニングで身体をつくってきた。3年後（北京五輪）で結果が出ればよいと考えていたが、予想より早くトレーニングの効果がでて驚いている」と今季の感想を述べた。

「この競技は8人の選手がとも強く、上位入賞するためにはこの選手に勝たなければならぬ。次のシーズンは毎回予選を通過して16位以上を目指す」と力強く語った。最後に「スノーボードクロスはマイナー競技だが自分が頑張ってメジャーにしたい」と笑顔で語った。



スノーボードクロス 高原選手

❄️ フリースタイルモーグル

堀島行真選手（スポーツ科4年）は、2年前のフリースタイル世界選手権でチャンピオンとなり、今回はアメリカ・パークシテイで開催されたデイベンディング・チャンピオンとして臨み4位だった。W杯は第9戦（カザフスタン・シムラック）で優勝し、全9戦決勝進出を果たし、年間総合2位となった。また、ユニバーシアード冬季大会ではモーグル3位、デュアルモーグル優勝と結果を残した。

堀島選手は「世界選手権は、苦手なコースだったが、勝ちたい気持ちでファイナル6人まで残った。最後まで気持ちをコントロールして良い滑りができた。W杯は初戦から怪我をしないよう楽しむ姿勢で臨み、後半はスキーにも慣れて点数が出るようになり競技に向かう姿勢が良くなった。総合2位は昨年よりステップアップして満足している」と今シーズンを振り返った。

今シーズンは、最高難度の軸をずらした4回転（コーク14）で王者キングスベリに挑んだ。

「チャレンジしたことで自分に残るものがあり、先を見据えたうえで良いシーズンだった。コーク14で評価され優勝できた。結果がついてきたことが嬉しい」と語った。

「大学4年になり授業が少なくなり、自分の時間をつくるのが大事。これからスキーを続けていくためにもその時間を大切に、次のシーズンはW杯優勝を目指す」と静かに闘志を燃やしていた。



冬季ユニバのメダルを持つ堀島選手



人工芝張り替えなど 野球場改修工事完了

改修工事完了を記念して
大学硬式野球部と
附属高校硬式野球部が試合

Ground

豊田キャンパスの野球場の改修工事が2月に終了し、これを記念して3月15日、中京大学硬式野球部と中京大学附属中京高等学校硬式野球部が試合を行った。

11月からの改修工事で人工芝のほか、ラバーフェンス、バックネットフェンスの全面張り替えのほか、本部席、スコアボードの塗装などが行われたことでグラウンドが新しく生まれ変わった。

試合前には梅村清英総長・理事長が祝辞を述べた。「球場の老朽化が進みリニューアルしました。高大連携を進める中で、こうした記念試合ができることを本当に嬉しく思います。これを機にさらに高大連携を深め、練習環境が良くなったことで更なる実績を期待しております」と選手にも呼びかけた。

梅村総長・理事長は始球式も行い「ナイスボール!」と声がかかり場内がどよ



めくほどの好技を見せた。
対戦は、高校の選手は金属バット、大学の選手は木製バットを使うなど、双方の野球ルールにのっとりた変則の対戦。前半は膠着状態だったが、中盤以降に得点を重ねた大学野球部が、終盤の高校野球部の追撃をかわして7-3で勝利した。
和田佳大主将(スポーツ科4年)は「公式戦で試合をする球場と近い環境になった。この恵まれた環境で練習し、日本一を目指す」と力強く語った。



激しく打ち合う田中選手(左)

プロボクシング 世界王者田中選手が フライ級初防衛戦に勝利

在学中の活躍に対し、
理事長特別賞が贈られた

Boxing

経済学部OBのプロボクシングWBO世界フライ級チャンピオン田中恒成選手(畑中)の初防衛戦が3月16日、岐阜市の岐阜メモリアルセンター「で愛ドーム」で行われ、田中選手は判定で田口良一選手(ワタナベ)を下し、初防衛に成功した。会場には中京大応援イベントに参加の教職員、学生ら約40人がつめかけ、バルーンステイクを手に声援を送った。

田中選手の戦績はこれで13戦13勝(7KO)となった。田中選手はすでに昨年9月に卒業しているが、3月19日の卒業式で在学中の活躍に対し、理事長特別賞が贈られた。

田中選手の相手の田口選手は元ライトフライ級2団体統チャンピオン。両選手はかつて別団体のライトフライ級王者同士だった当時、タイトル統一戦の話が進んでいた。しかし、田中選手の負傷なども

あつて白紙になり、田中選手はその後、階級をフライ級に上げて昨年9月に3階級制覇を達成していた。その間に田口選手はライトフライ級の世界タイトルを失っていたが、田中選手は「そうはなっても田口選手は強い。一度は戦いたい」と初心を貫き、田口選手も階級をフライ級に上げて応えた。

試合は両選手が1ラウンド(R)から積極的に打ち合い、3Rには田中選手が顔面にパンチを受けてぐらつく場面もあった。しかし、田中選手は落ち着いた試合運びで的確にボディと顔面にパンチを打ち分けた。後半戦は田中選手がパンチの正確性でリードし、最終12Rは両者壮絶な打ち合いを披露した。判定は3-10だった。田中選手は「打ち合いが勝ちにつながったので積極的にいきました。いい試合ができて田口選手に感謝です」と話した。



池田選手、小西選手、本郷選手(左から)

2020年TOKYOへ 本郷理華・小西杏奈・池田樹生 卒業

(フィギュアスケート) (競泳) (陸上)

フィギュアスケートで活躍した本郷理華、
競泳100m背泳ぎで結果を残した小西杏奈、
パラ陸上で日本新記録を樹立した池田樹生が卒業

Graduation

名古屋国際会議場で3月19日に行われた卒業式では学生、院生合わせて2895人が「中京」の学び舎を巣立った。その中にはスポーツ分野で活躍した選手の姿もあった。

式典終了後、フィギュアスケート世界選手権やグランプリで活躍した本郷理華選手(スポーツ科学部、中京大)、競泳100m日本選手権で優勝、アジア大会で2位と結果を残した小西杏奈選手(スポーツ科学部、サイサン)、ジャパンパハリピック400mで日本新記録を樹立した池田樹生選手(スポーツ科学部、博報堂デジタルアドバタイジングコンソーシアム)が報道陣の取材に答えた。

本郷選手は「フィギュアスケートは個人競技なので、スケート部のみんなで一緒に頑張ろうとか、他の部活の人と学校一

丸となつて頑張ろうとか、それが凄く新鮮で嬉しかった」と笑顔で語った。

小西選手は「卒業式中に大声で叫びましたが東京五輪で金メダルを取りたい。いろいろなところで中京大OGとして応援するよ、という声をもらおう。それが一番の力になり、大学の素晴らしところ」と力強く語った。

池田選手は「大学生活で友人たちとともに多くの事を学んだ。まだ、卒業したという実感はないが、この後に『陸上競技部の卒業式』がある。その時に初めて旅立つんだな、と思うのかもしれない」と振り返った。

本郷選手はフィギュアスケート競技を続ける。小西選手は東京五輪、池田選手は東京パラリンピックに向けてさらに上を目指す。



横井選手、井上選手(左から)

令和元年の新生 横井ゆは菜・井上瑠汰

(フィギュアスケート) (ショートトラック)

フィギュアスケートで成長著しい横井ゆは菜、
ジュニアショートトラックで活躍した井上瑠汰、
令和元年の新生が、大学での成長を目指す

New face

4月2日、名古屋市の日本特殊陶業市民会館で入学式が行われ、学部生、大学院生合計3017人が入学し、新しい生活が始まった。この中には多くのスポーツ競技の選手たちも顔をそろえていた。

このうち、式終了後にスポーツ科学部に入学したスケート部2選手がメディア各社の取材を受けた。

フィギュアスケート2018全日本ジュニア選手権で優勝した横井ゆは菜選手(中京大中京)、2018世界ジュニアショートトラック選手権大会リレーで優勝した井上瑠汰選手(冲学園)が、入学式の看板前などでインタビューと写真撮影に応じた。

横井選手は「フィギュアの面では、『楽しむ時・追い込む時』など生活のメリハリをつけ、充実した時間を過ごしていきたいです。大学生活では、授業の内容が大変そうなので単位をしっかりと取り、友だちと遊んだりしたいです。まずは『ごはん行こうか』の流れをつかんでいきたいですね」と話した。

井上選手は「スケートでは、大学内リンクがありますし選手層も厚いですが、この練習に没頭できる環境で、自分がどこまで成長できるのか楽しみです。生活面では、一人暮らしなので、自炊を頑張っていこうかと思っています」と大学生活の意気込みを語った。

オリンピック、パラリンピックに出場した中京大学関係者は、延べ約1300人である。また、指導、スポーツ科学の面からオリンピック、パラリンピックを支えてきた教員も多く存在する。本ミュージアムは、これらの関係者から寄贈・寄託された資料とスポーツ科学部のスポーツ史研究者が収集した資料を所蔵し、この部を大学による社会貢献の一つとして市民に無料で公開し、また、小中高における教育活動の場として提供する。

共有し、スポーツと社会についての思考を深め、それを日々の営みへと反映することができる。そうした経験を提供することにより、より良いスポーツと未来の構築に貢献することを目的として開設する。

収蔵資料の点数は2018年度末現在3698点を収蔵。デジタル画像30710点を収蔵。また常時150点の資料を展示する。

展示物の種類は、各種スポーツに関する競技具、記念品、写真アルバム、新聞記事、ポスターなど。また、本学出身のアスリートから寄贈を受けたオリンピック代表選手団ユニフォームや競技具、オリンピック参加時の書類など多方面にわたる。

現在、今秋の開設に向けて準備を進めている。



今秋、スポーツミュージアム開設

オリンピック出場選手のユニフォームや競技具などを展示

Museum

大学スポーツシンポジウム開催

UNIVAS(大学スポーツ協会)の発足をうけて



大学スポーツの現在と未来を語り合うシンポジウムが3月20日、筑波大東京キャンパスで筑波大、神奈川大、関西学院大と中京大が参加して開かれた。一般社団法人大学スポーツ協会(UNIVAS)への加入については、中京大が発足と同時に済ませたのに対し、他の3校は現段階では加入を控える姿勢を示した。そんな中で、第一部は大学経営陣により、「学校教育におけるスポーツの位置付け」をテーマに、第二部では「大学スポーツの現在地と『未来』についてパネルディスカッションが行われた。

第一部ではまず、筑波大の永田恭介学長がオープニングスピーチで、「大学こそが責任の主体であり、(学生たちの)学業充実、成績管理、キャリア支援などは当然、大学の責任。学生たちが安心して取り組めるようにガバナンスの体制構築をしなければならぬ。」などと述べた。パネルディスカッションでは、各大学から意見が述べられ、UNIVAS設立準備委員会がまとめた学業充実、安全安心・医科学、事業・マーケティングなど14のテーマ内容については各大学とも「賛同する」との意見で一致した。ただ、UNIVASの体制は、「大学が完全な主体となっていない」と疑問の声も出された。

中京大からは、松尾貴光企画局長とスポーツ振興部の小栗優貴係長が出席。第一部で松尾企画局長は、本学には「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」という建学の精神があり、「学術とスポーツの調和」を使命としてスポーツには特別な思いを抱いている。同時に時代の流れの中で、学校スポーツのあり方については疑問も持ってきた。2015年に梅村学園・中京大学スポーツ将来構想会議を設けて、本学のスポーツのあり方について議論を進め、体育会組織の大改革を行ったことを報告した。

大学の外部組織に位置づけていた体育会を管理下に置き、体育会活動を「正課外教育」とした。大学スポーツが正式に教育活動の二環となり、併せて学外指導者と業務委託契約を結ぶことでその位置づけを明確にした。体育会活動に積極的な関与と責任を持つべきで、これはリスクマネジメントでもあると述べた。

第二部では小栗係長が登壇。日本のスポーツは、独自の文化を形成してきた面がある。現在でもさまざまなハラスメント、指導者の質などで、時代錯誤ともいえる「正常とは言い難い」状況が少なくない。同時にスポーツには多くの可能性があることも確か。スポーツ競技の「エンタメ化」の進展も予想されると述べた。

そんな中で、大学スポーツ政策については、「正常化」と「最大化」を中長期の展望にしている。正常化では、各部会計の透明化、指導者の研修、学業とスポーツの両立、安全管理などの模範事例を情報公開していき、東海地方の大学スポーツを牽引していく気概を持ちたいと力を込めた。一方、最大化に関しては、スポーツ活動の産学官の地域連携を第一に掲げた。地域との関係をより密接なものにし、地域のファンづくりにもつながっていきたいと語った。

Symposium



豊田スタジアムで 明治大学との 交流試合

新チームで
2019年キックオフ

Football

サッカー部男子は3月21日、愛知県豊田市の豊田スタジアムで、明治大とのサッカー交流試合を行った。この交流試合は今回で7回目の開催となるもので、例年の時期に入場無料で実施されている。当日朝は春雨がそそ降る天候であったが、14時キックオフを前に、開場の13時にはほぼ雨が止んだ。スタジアムには両校OBや学生、教職員のほかに、地域の少年サッカーチームのメンバーたちや一般市民など、あいにくの空模様にもかかわらず多くの人が集い、声援を送った。

2018年度総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントで優勝した明治大学と同大会3位の中京大学だが、今回の交流試合は、当時の最上級生が卒業して新チームで臨む対戦。新主将の青木天良選手（スポーツ科4年）は、2019年度の目標としてまず、東海リーグのタイトル奪取を掲げる。また、昨年度は7年ぶり6度目の天皇杯出場を果たし



た経験を活かして、今年度も出場を狙いたいとのこと。「そのためにも、ふだんの練習から、常に目的意識を持って取り組んでいきます。主将として、チーム内の各リーダーと連携しつつ、全員が自覚と責任を持って練習・試合に臨むチームづくりを心がけます」と、主将としての思いを語った。

交流試合は残念ながら明治大学が前半に1点、後半に3点を奪い、0-4に終わったが、GKを中心にしたディフェンス体制と、果敢に相手パスに斬り込み、攻めにつなげる姿勢を見せた。今年度のさらなる活躍に期待したい。

CHUKYO UNIVERSITY SPORTS

先輩 NOW

角谷 貴恵さん

Kie Sumiya

2014年度スポーツ科卒、愛知県出身。附属中京高校、中京大学を通じ、硬式野球部員としてチームのマネジャーを務めた。球団への就職は、「スポーツに関係した仕事に就きたい」と、スポーツ用品メーカーなども含め、スポーツに関係する就職先を探した。そんな中でプロ野球球団のクラブが職員募集をしていることを知り、応募した。試験は、第1次の筆記試験、2次、3次の面接試験に見事合格。プロ野球球団職員として多忙な日々を送っている。



社会人として5年目に入った。「毎日が新鮮です」と笑顔で話す。名刺の肩書には「ライセンス部チームリーダー兼広報部広報課」とある。昨年までプロ野球セントラル・リーグで3年連続優勝している広島東洋カープ職員とは、どんなことをしているのだろうか。面白そうだなあ、でも大変だろうな、いつも野球が見られていいなあ、名刺に目をやりながら想像してしまう。

「きちつとした日程の中でやつていく仕事なので結構ハードなんです。特にシーズン中は。ライセンス部は、球団の持っている意匠や商標、著作権などの使用について、さまざまな企業や団体との交渉や相談を受け持つのだという。広島東洋カープは戦後間もなく、市民の球団としてスタートした。それだけに昔から地元には熱烈なファンばかりだが、3連覇を果たした今、全国から注目を浴びるようになった。食品、飲料品、文房具などあらゆる業種のメーカーや販売会社から球団のロゴやマスコット類の商品への使用許可を巡る話



が舞い込んでくる。「交渉件数は」年に500件近くになります。入社した当時に比べ倍増した。もう一つの担当が広報だ。球団のホームページに情報記事を書いたり、新聞、テレビといったマスコミからの取材依頼に対応をしたりと、バラエティーに富んでいる。2017年シーズンからは、ウケイも嫌もしている。先発メンバーや選手交代の情報も場内アナウンスする、あれである。6人の当番制だが、担当した試合は1人でこなす。「選手交代の情報など間違えないように試合中は緊張の連続です。トイレにも行けません。仕事となると何事も大変なのだ。試合が見られて楽しそうではないのである。

とはいっても、昨年11月には素晴らしい体験をした。ドラフト会議への出席だ。松田元(はじめ)オーナーの「広報担当だし、二回見ておいた方がいい」との方針で緒方孝市監督やスカウトの人たちとともに、「テールの端っこに座っていました。これまでテレビでしか見たことがなかった場所に、まさか私が」と振り返った。

「仕事はどんな業種も厳しいと思います。プロ野球球団もそうです。ですが、二つと三生懸命取り組み、やりがいが出てきます。それが仕事なんだと思います」。後輩への貴重な一言だ。

附属高校トピックス

eスポーツ部を創部 高大連携で高みを目指す



中京大学附属中京高校がeスポーツ部を創設し、3月26日に同校で記者会見が行われた。eスポーツとはコンピューターゲーム上で行われる競技。欧米では昔から競技はスポーツと捉えられており、大規模な大会も開催されプロ選手も多い。今後はオリンピック競技になる可能性も高いとされている。

会見では中京高校の伊藤正男校長が「(中京)大学の支援を受けて行うeスポーツ部は高大連携する中京にしかならない」と挨拶。eスポーツ部の小川青空監督は「全国を目指す(中京高校の)部活動と同じように高みを目指す」と語った。サッカー部の岡山哲也監督は「バーチャルがリアルに活かされると思う」と、eスポーツを通しての部員のサッカー技術と

の相乗効果を期待していた。

また中京大学の卒業生であり、日本の女性初のプロゲーマーの百地裕子さんも指導に加わる。「何かに打ち込み一番になる経験が今後に生きたる。皆さんには真剣に取り組みいろいろなものを勝ち取ってほしい」と部員にエールを送った。

現在はサッカー部員の中で入部を希望した7人が「ウイニングイレブン」というサッカーゲームで活動を行っている。部員はサッカー部と兼部し、練習はサッカーの練習が無い時間に行っておりトータル部活動の時間は増える。しかし「楽しそうだから」と入部した部員らは「サッカーを俯瞰できる」「入部してよかった」と笑顔で答えていた。また「サッカー部は全国制覇を目指して練習していますが、eスポーツでも国体優勝を目指す」と力強く話した。

目標は今秋の茨城国体出場。また、今後は取り組むゲームを格闘技や野球にも広げていく。

高大連携を進める中で、中京大学工学部の目加田慶人教授と、瀧剛志教授がeスポーツ部の顧問として就任。目加田教授は「画像のパターン認識に関する研究をしている。ゲームの上手な選手とそうでない選手の間、目や体の動きを解析し、部員に情報提供している」と考えている。瀧教授は「リアルとバーチャルの両者の関係性も見ながらゲームを分析し、高校生と一緒に行っていく」と語った。

中京大学附属中京高校のスケート部の渡辺伸雄監督と壺井達也選手、山下真瑚選手、浦松千聖選手(全員2年)は3月14日、伊藤正男校長とともに梅村清英総長・理事長ら学園首脳を訪問し今シーズンの成果を報告した。

壺井選手は昨シーズンの全日本ジュニア選手権で優勝を飾り、今年クロアチアで行われた世界ジュニア選手権の代表に選ばれた。1月のインターハイでは個人2位に入った。

山下選手はシニアのグランプリシリーズカナダ大会に出場し2位を獲得。インターハイでは当時3年生の横井ゆは菜選手、荒木菜那選手とともに学校総合優勝に貢献した。また浦松選手と国体の愛知県代表に選ばれ、少年女子の部で優勝した。

壺井選手は「今シーズンは初めて世界ジュニア選手権に出場することができました。結果では少し悔しい思いをしました。



会見する小川監督

スケート部 今シーズンの成果を 学園首脳に報告



壺井選手、山下選手、浦松選手(左から)

でしたが、来年も出場して少しでもリベンジできるように頑張りたいです」と振り返り、山下選手は「インターハイでは先輩たちが良い成績を残してくれた結果の学校総合優勝だと思っています。来シーズンも調子を崩さないように頑張りたいです」と述べた。

浦松選手は「国体では山下さんと二人で優勝できました。フリープログラムでは少し調子を落としましたが、ショートプログラムで良いスタートが切れたので、今後はショートとフリーの調子を合わせられるように頑張ります」と話した。

梅村総長・理事長は「コンディションを維持して1シーズン成し遂げることが大変だと思います。日々ご指導いただいている先生方に感謝いたします。今後もますますご活躍されることを祈っています。おめでとうございます」と激励した。

{ Chukyo's COACH }

中京大学ダンス部

和光 理奈監督

Rina Hirano

2004年春、ダンスの教育者を志して中京大学にやってきた。東京生まれの東京育ち。「親戚も知人もいない。初めての土地でのスタートではない」と振り返った。教員として就任と同時に、部員わずか5人、解散の危機にさらされていた体育会ダンス部

の指導者も引き受けた。筑波大生時代、ダンス部に所属していた経験はあったが、「どのように練習をして、どう部を運営していけばよいのだろうか」と手探りの状況での挑戦となった。

ダンスとの出会いは4歳の時、クラシックバレエが最初だった。「母が自分のやりたくてできなかったことを娘の私にやらせてくれたんですね。すごく楽しかったことを覚えている。成長とともにさまざまなダンスに触れる機会が増え、「自分も楽しい、見てくれる人も楽しい。まさに自分を表現する場だ」と確信した。そして成長とともにますますダンスの魅力にのめり込んでいった。

何がそんなに。「魅力はいろいろあります。素敵な衣装、大自然を表現、俳優のような振る舞い、「私にとつて自分が何にもなれるんです。ダンスの特長は変身できることと言えるか

な」。明確で弾むような話しぶり。だが、芸術であり、スポーツでもある分野に、表現に至る苦しみがないはずはない。「それはあります。すごくあります」。

少し厳しい表情で言葉が返ってきた。ダンスの創作にかかる時間の長さは、演じる時間の比ではない。作品のテーマを決めて創作にかかり、音響、照明を探し出す。衣装なども含め、まさにゼロからの生みの苦しみだ。10時間以上も大学のダンス場で過ごすことも珍しくない。「でもマルチにいろいろなことがやれる。苦しみは乗り越えられる」とまた笑顔が戻ってきた。

今、部員は20人ほどいる。うち男子が6人。「10年で全国クラスの部にしたい」と取り組んできて、7年目の2010年の全国大学創作ダンスコンクール「アーティストック・ムーブメント・イン・トヤマ」で初入賞。その後は大きな大会の上位の常連だ。「私たちができる」。部員も自信を付けてきた。

部員、授業の学生たちに、いつも言うているのは、「いろんなことに感じてほしい。いつもアンテナを張って。日常、電車の中でも、授業中も、自然の中でも、風も光も、それらを感じて新しいことを見つけよう」。



和光理奈(わこう・りな)監督 東京都出身。1997年、筑波大学大学院修士課程修了。体育学、舞踊教育学修士。東京都の公立中学校教諭を務めた後、2004年4月、中京大学体育学部嘱託講師に就任。07年助教、08年に専任講師に。11年からはスポーツ科学部専任講師。体育会ダンス部の監督には中京大勤務とともに就任した。



学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ

【中京大学スポーツ】



大体育館(3号館)



発行／中京大学
〒466-8666
名古屋市昭和区八事本町10-1-2

■ 広報部
TEL 052-183517135

スポーツキャラクター：イーグル(鷲)

中京大学スポーツのシンボルとし、「ルールを守り、チームを敬い、どのような困難も乗り越え高みを目指す勇気を象徴し、チャレンジ精神を表す」と位置づけている。